

残りの者
シャーアル

石巻祈りの家NEWS LETTER 「シャーアル」 (137号)
986-0801 宮城県石巻市水明北3丁目13番28号
TEL /0225-96-1497 Email/ hjm-ja2@yg8.so-net.ne.jp

振替口座 02290-6-126186 口座名称 阿部 一
●代表/阿部 一 ●副代表/菊池せい子



信仰: 老いても福音宣教のために

- 7月は梅雨を引きずった形で、寒く雨の日が多い日が続きましたが、月末に「梅雨明け」の声を聞くと同時に30度を越す暑さと共に本格的な夏が到来しました。皆さまにはお変わりございませんか?
- 御案内を頂き何年かぶりに、7/8-9にシオン錦秋湖で催された「第51回東北教役者会」に参加してきました。高齢者の事故の報道が続く、皆さんが心配されるので、前日の礼拝後にCRVを運転して出かけました。
- 早めに着いたので、まだ鶯の鳴き声がこだましているキャンプ場の大自然の森林の中を散策して疲れを癒やすことができました。
- この群「石巻祈りの家」の責任を持ってから、東日本大震災震災支援でお世話になった牧師からこの会を紹介されてこの会がどのような目的と経緯で発足したのかも知らず、前回は参加しました。
- 今年で51回目の集会ということですから半世紀も前から、東北で奉仕されている牧師・伝道者が集まり、教会も少ない東北の地での宣教活動のために、祈り合い協力し合うために集ったことが予想されます。
- 当初は50名を超える参加者があったようですが、今回は青森、岩手、秋田、山形、福島からの20名ほどで、高齢者が多いのは、現在の日本のキリスト教界で献身者が少なく世代交代が難しくなっている現状を目の辺りにした気がしました。
- 前回は「現代のカルト」と取り組んで居られる講師から新たに生まれているカルト集団の実情と問題点を学ぶことができました。そのためにインターネットのFBで勧誘している中国のカルト「全能神教会」に気づかないでフレンドになっている信徒や牧師に警告を送ることができました。
- 今回は、集まった牧師一人一人が、どのようにして救いに導かれ、献身されたかのお話を伺い、神の恵みの大きさに胸が熱くされた。恵みが一杯の祝された集会でした。
- さらに隠退された後、故郷、須賀川で83才の現在も、主のしもべとして福音を伝えるために奉仕され、無牧の気仙沼教会にも月2回来られて、礼拝のご用をされている尊敬する後藤正嗣師ともお会い出来る思いもかけない恵みを頂きました。
- 錦秋湖から帰った数日後に、今度は仙台バプテスト神学校の校長をされ、福島の大きなキリスト教福祉団体でチャプレンとして職員と入居者のための礼拝、近隣の無牧教会での奉仕、家庭集會をされてきた84歳になられた尊敬止まない渋谷敬一師が、私たちの教会を訪ねて下さいました。
- いつも祈り支えていただいて来た、80歳をはるかに越えても救霊の熱き思いをもって、主の奉仕をされているお二人の尊敬する大先輩牧師から励ましを頂いた「恵みの7月」でした。
- 猛暑が予想されるこの夏、皆さまの健康が守られて元気で与えられて日々をお過ごし出来ますように祈ります。

先月の多くの恵みから

- ① 酒田リーテル教会宣教70周年記念月間で、8/4の礼拝で証しをすることになりました。1964年から9年間、酒田の高校に勤務していた期間お世話になった教会です。その時の思い出と今まで頂いた来た主の恵みを分かち合います。
- ② 大震災直後から女川・石巻の支援に入り、「絆フレンド」を立ち上げて、被災者作成の製品販売をされてきたギルバート宣教師夫妻がお母さんのケアのために7/25帰国されました。

- ③ **祝** おめでとうございます! Dean師とLindaさんの長男Joshua君(日本で)と次男Christopher君(アメリカで)がダブルで結婚に導かれました。2つの新しい家庭が、主を中心とした素敵な家庭を築けるようにお祈りいたします。
- ③ 東日本大震災後、祖母の出身地の被災地渡波の子ども達に勇気を与えたいとリストバンドでの募金を募って、津波で荒廃した松並公園を整備し、沢山の遊戯の設置をしてくださったオハイオ州のMIYA Mooreさんが夏休みでお母さんと石巻を訪問され、「希望の家」で宿泊されて、その後の被災地を視察されました。7/4に、Lindaさんの誕生お祝い会でお会い出来ました。沢山の土産をいただきました。
- ④ 7/13にICCで開かれた、東北教役者会でも奉仕された横山大輔・和子さんのWorkshopに教会員と共に参加できました。
- ⑤ 毎週水曜日午後には訪問している特養介護ホーム入居者の佐藤 隆さんを7月も継続して訪ね、賛美と祈りとみことばの時を持つことができました。信仰が与えられるように。
- ⑥ 8月は教会の諸活動(聖書を読む会/ほっと・Time/コーラス「花」/楽しい手芸の会)はお休みです。9月に再開です。
- ⑦ 7月も、皆さんからの支援献金で教会活動が守られた上、さまざまなお菓子や果物、お茶、切手、手紙、メール、電話などで温かい励ましを頂き心からの感謝をいたします。

今月も以下の課題を祈って頂けるようにお願いします

- ① 今野かつ子さん/新井勝太・李恵子夫妻/神保秀紀兄/鈴木手以師Deiさんの治療のために。
- ② 石巻各教会の働きと地域より求道者が起こされるように。
- ③ 大平英秀さん/佐藤 隆さんのために。
- ④ 九州の被災者のために。
- ⑤ 石巻ミニストリーネットワークの働きのために。
- ⑥ 渡辺総一絵画展の実現のために。

群の定期集会	
・礼拝(毎週日曜日)	10:00-11:30
・祈り会(毎週水曜日)	10:00-11:30
・聖書を読む会(第1火曜日)	10:30-12:00
・ほっと・Time(第3火曜日)	10:30-12:00
・コーラス「花」(第2,4木曜日)	13:30-15:00
・楽しい手芸(第2,4月曜日)	10:00-12:00
・学習支援(地域の子どもの要望に応じて)	

信仰を詠う

8月 わが目の梁

目薬を挿して目の梁溶けませと
行方を追ひてまばたき止める

百均の「4」の老眼鏡みは瞳らすも
わが目の梁の覆いとどこ滞る

許すより許されたいと願うように
なって目の梁一本抜けたかと



阿部 八重子
ただいま視力0.7、白内障の手術目下免がれています。
一偽善者たち、まず自分の目の梁をとりのけなさいー
マタイ 6-5ルカ6-41



7/8-9 シオン錦秋湖での「第51回東北牧師者会」 青森・秋田・岩手・山形・福島の東北各地の牧師による救いの証しと召命の証し会 横山大輔・和子さんの特別賛美奉仕



シオン錦秋湖で後藤正嗣師と 7/10 渋谷敬一師が来訪 7/20 Andy & Lorna Gibert 宣教師夫妻帰国歓送会 (ICCで) 7/4 Linda誕生お祝い会



7/7 礼拝に参加されたJoshuaと大風美菜さんの結婚を2つのケーキでお祝い会 そして全員で記念撮影 MIYA Mooreさんの訪問が新聞に MiYA親子と一緒に

アドナイ・イルエ

「アドナイ・イルエ」=主の山に備え在りの

現代の問題を考える

死ぬことは人間の「権利」か

石巻祈りの家 代表 阿部 一

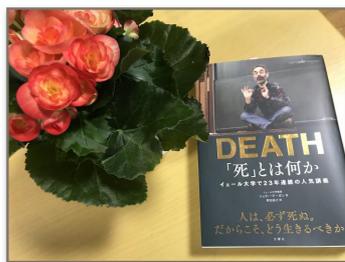
2011年の3.11東日本大震災で、私も自宅が大きな被害を受けた被災の身であったが、神の導きと摂理の中で敬愛するディーン宣教師と共に、被災者支援活動に関わるようになった。

結婚以来50年以上、朝日新聞を購読してきたが、支援活動では地元被災地の情報が不可欠である。この件に関しては何とんでも地元紙に中央紙は叶わない。そんな理由で東北全体をカバーする「河北新報」に切り替えた。この新聞の朝刊には石巻地区の詳しい情報が得られる「石巻かほく」紙がセットになっているという利点もあった。石巻のような小都市の地方紙は、それを読む対象者がその地区に限られてくるので、政治的な記事や文芸的な記事は少なく紙面は地区内のイベントや地域の行事の記事、そしてお店の広告が多いが、もう1つの大きな特徴は死亡広告多く、これはコミュニティの情報としては重要な働きをする。

いつのころからか、朝刊の「石巻かほく」と夕刊の「石巻日々新聞」が届くと最初にその「死亡広告」を目を通すようになった。石巻出身でない私にはほとんどが知らない方のものである。

そこで、一番気になるのは亡くなられた方々の年齢である。聖書では「私たちの齢は七十年。健やかであっても八十年。」(詩篇90/10)とあるが、今や日本では90代の人が多く、最近では100歳を越えている方も時々見かける。ここでも、日本の高齢化時代到来と医療の発展を実感する。これらの方を天寿全うと思う一方で、40台、50台の方を見かけるとその家族の悲しみを思いやってしまう。

この世に生を受けた者にとっては「死」は避けられない。誰しも長生きしたいと切望し、その努力としてアンチ・エイジングのサプリメント摂取や体力保持のトレーニングが今や大流行である。しかし、病気や事故など予想もしない形でも、突然訪れることも多い。



毎週、友人の依頼で介護施設にいるお兄さんを訪ね、賛美歌を歌い、祈り、短く聖書の話をし、その方の思い出を聞かせてもらっている。介護士のきめ細かい配慮を目にしながらもコミュニケーションが取れない認知症や脳梗塞の後遺症がある高齢者が椅子に座ったり、ベッドに寝かされたままで話しもしない広間は、何か異様な光景に映る。核家族が進み、子ども達も仕事の関係で遠くに離れて、訪れる人も少ない。

一方で、医療も高度に発達してきたために、病院では回復不可能な病を持つ高齢者が、体に沢山のチューブやモニターを装着して寝かされている姿や回復不可能な末期の中で痛みや苦しみの中にある患者を見ると、改めて「生きる」ということはどういうことかを考えてしまう。

日本では「死」は希望のない思ふべきものと伝統的に考えられてきて、真っ正面からこの「死」の問題を、個人的にも、社会的にも取り組んでこなかった。そのことに気づき、医療面ではターミナル・ケアや「終活」などが話題となり、「安楽死・尊厳死」についても報道されるようになった。世界では、幾つかの国が厳しい条件の下で、正常な意識を持つ末期ガンの患者などの安楽死を法的に認めている。

ほとんど表には出てこなかったが、今回の参議院議員選挙で、候補者を立ててまで「安楽死制度を考える会」がその主張を展開した。議員の当選よりも、問題提起がその目的のように思われる。

ただ、その主張の中で、家族に迷惑をかけたくない、将来の不安に備え貯金をする必要がない、予算をかけずに国民が安心を感じる、というような主張には疑問を感じた。最も気になるのは「自分の最後は自分で決めたい」という主張である。問題を感じるのは、果たして死ぬことは人間の「権利」であるかということである。つまり、「いのち」は与えられたもので、自分で獲得したものはない。その「いのち」を自分の自由という権利で抹殺することは許されるのかという問題である。これは末期の病人への無用な延命措置の問題とは意味が違うように思う。

それを避けるのではなく、老いや病も含めて、与えられている「いのち」を懸命に生きることこそが、その人の人生であり、その苦しみや困難の中でどう生きるかこそ、私たちは問われているように考える。「いのちは神のものである」というのが聖書の主張である。「あなたと共にいつもいる」と約束されている神へ信頼を持って自分の人生で応答したい。